

1. 看護学部・看護学研究科の教育

1) 看護学部の教育

(1) 新カリキュラム

看護学部では、今後の高等教育の将来像や看護職者に求められる能力等を見据えてカリキュラムや教育内容・方法の見直しを行い、令和4年度入学生より新たなカリキュラムの運用を開始し、令和5年度で2年目を迎えた。新カリキュラムでは、ディプロマ・ポリシーに定められた学修目標をより達成するための授業科目の設定、医学的知識と看護の統合および臨床判断の強化、主体的な学修を可能とするために授業科目の内容の精選・整理および時間数の絞り込み、今後の社会および看護に求められる人材に必要な能力を修得できる授業科目の設定、効果的な学修を促進するための開講時期の見直しなどを行った。新カリキュラムへの円滑な移行、およびカリキュラム改正を通じた教育の改善を推進するために、看護学部で今年度行った主な取り組みについて述べる。

① 新カリキュラムへの円滑な移行のための取り組み

今回のカリキュラム改正では、必修科目の一部で単位数や時間数の変更などを行っている。新カリキュラムへの移行に伴い、復学した学生や再履修が必要な学生に不利益が生じないように、可能な範囲で読替え科目を設定するとともに、必要な学生には個別に履修計画の立案と履修指導を行い、科目担当教員、学年担当教員とも調整を図りながら対応している。昨年度2年次の「看護基盤実習」を履修できなかった学生への対応として、新カリキュラムの「看護基盤実習」および「看護実践能力開発実習Ⅰ」を読替え科目とし、該当する学生への履修指導を科目担当教員と学年担当教員が連携して行った。

令和6年3月には、FD委員会の企画で、新カリキュラムの「看護基盤実習」「看護実践能力開発実習Ⅰ」での学生の反応や学び、教育上の工夫、目標の到達状況、次年度に向けての課題などについて科目責任者からの報告を受けて、学部内でディスカッションする機会をもった。次年度も新カリキュラムによる4年間の積み上げを意識した教育の実現と円滑な移行ができるよう、引き続き、学部全体での情報共有や検討を行っていく。

② 看護援助学科目の再編と展開方法の変更

新カリキュラムでは、主体的な学修を可能とするために授業科目の内容の精選・整理および時間数の絞り込みを行い、看護援助学科目については科目間で学習する援助技術の重複をなくして、再編している。この再編においては、学習進度に合わせて、厚生労働省の「看護基礎教育検討会報告書（令和元年10月15日）」に示されている看護師教育の技術項目と卒業時の到達度を基に本学で決定した各看護技術の学習内容と方法に沿って、各科目で学習する援助技術の整理と学習の順序を検討した。さらに、講義が一方的な知識の伝達にならないように、講義と演習、関連科目の学習を連動させながら学べるような授業日程とし、主体的な学修や既習の知識の活用を促すために、個人の事前・事後学習に加えて、Moodleを活用した事前・事後テストや授業時間外のグループ学習を導入するなどを行った。

③ 実習科目の変更への対応

新カリキュラムでは、1年次から看護の対象となる人の理解を徐々に深め、医学的知識と看護の統合および臨床判断力の強化を図っていくため、臨地実習も様々な変更を行っている。新カリキュラムの1年次の「ふれあい看護実習」は、昨年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、予定していた在宅老所での実習が2日間から1日2時間と大幅に減少したが、今年度は当初の計画通りに

在宅所での実習を行うことができ、地域で暮らす高齢者とのふれあいを通して、看護の対象となる人を生活者として理解するとともに、援助を通してケアする者の責務を学ぶことができた。

2年次の実習の「看護基盤実習」は135時間から90時間となり、目的・目標が見直され、高齢者を受け持ち、対象者の理解や対象者に合わせたコミュニケーション、日常生活の援助について学ぶ実習が行われた。2年次の新設科目「看護実践能力開発実習Ⅰ」において症状をもつ人の身体状態のアセスメントと看護援助を学ぶ実習を行い、医学的知識と看護の統合および臨床判断力の強化を図った。令和6年度は令和7年度からの4年次の統合的な実習である「総合看護実習Ⅰ」「看護管理実習」「在宅看護実習」に加え、新設の「総合看護実習Ⅱ」「家族看護実習」「看護実践能力開発実習Ⅱ」が円滑に行えるよう、実習内容の検討、具体的な運用、実習施設との調整を行う必要がある。

④ 今後の課題

今後2年間はカリキュラムの移行期間となり、年次進行に合わせて新設科目や時間数等の変更科目が順次開講となる。旧カリキュラムから新カリキュラムへの移行がスムーズに行えるようにするとともに、今回のカリキュラム改定の目的が達成されるよう、新カリキュラムでの学習効果や課題のモニタリングを行い、継続して改善を図っていく必要がある。そして新カリキュラムの評価の一つとして次年度の在学学生を対象にカリキュラム調査を実施し、カリキュラムの課題を抽出し、改善に活かしていく必要がある。新カリキュラムで目指している学生の主体的な学びを支援するために、ルーブリックの活用による効果の評価や、次年度以降のポートフォリオの導入の検討など、引き続き主体的な学びを促進する仕掛けづくりを進める必要がある。

休学中・留学中の学生や再履修している学生について、カリキュラム移行に伴う不利益が生じないように、教務委員会と学生委員会が協力しながら支援を行っていく必要がある。

(2) 教育環境の整備：SimCaptureを活用した技術教育

講義・演習・実習の循環で看護学の知識・技術・態度を統合し、実践へ適用する能力を育成するために、シミュレーション教育を積極的に活用してきた。令和4年度に文部科学省補正予算「ウィズコロナ時代の新たな医療に対応できる医療人材養成事業」で導入した「SimCapture」を活用して、映像による振り返り学習を1回生～4回生の演習科目や実習科目で取り入れた。これまで、補完的・代替的に実施してきたオンライン教育・シミュレーション教育を発展させ、看護者として思考する授業設計を行った。学生自身が設定したゴールに向けて、グループ学習に積極的に取り組むなどの成果が認められた。シミュレーション中の動画をSimCaptureで管理することにより、学生は自らの行動を客観的に振り返り、よりよい実践に向けて課題を抽出し、改善に努める姿勢も認められた。

助産看護では分娩介助技術の自己学習や技術試験の運用にSimCaptureを取り入れた。自己学習では学生間の相互評価機能や動画撮影が簡便に安全なオンライン環境で実施でき、自己の課題に応じた効果的な学習が可能となった。技術試験ではそのコース設計により試験実施時の学生の反応に加え、教員が試験前後の学生の思考や自己評価を確認しやすくなり、学生の個別的な課題にあわせた指導につながった。

更に活用を推進するために、iPadを使って動画管理や技術の評価ができるように整備し、新カリキュラムの実習科目に対応するために中機能シミュレーターを1体導入した。

現在、自己学習室についてはオンライン学習等が可能な部屋を整備し運用しているが、対面講義が通常となり学習方法や学生のニーズも変化してきており現状にあわせた運用方法の改善が求められる。看護技術の習得に関しては授業時間内のみでは難しく、空きコマや実習期間中の学内日などに自由に自己学習できる環境の整備も必要である。

(3) 4回生による看護技術学習サポーターの試行

新カリキュラムでは、看護援助学科目の教育内容を整理・精選し学修時期や方法を見直した。自己学習時間を確保し、演習の時間以外に事前学習・事後学習に主体的に取り組めるよう変更した。学生が課題をこなすだけでなく、キャリアと関連付けながら目指す自己像に向けて主体的に学べるようにしていくために、学びを刺激し支援する先輩の存在が重要である。そこで、令和5年度は治療援助論（2回生前期 45時間）において4回生による看護技術学習支援を試行的に実施した。

① 方法

治療援助論の「注射の準備と実施」「緊急時の対応」の2回を設定し、教員は、ラーニングサポーター学生（以下LS学生とする）による学習支援を授業計画に組み込んで設計した。演習担当教員数は当初計画通りとし、学生の役割と教員の役割を明確にした。4回生全員に資料を配付して説明し、学生が自由意思で参加できるようにした。

② 結果

のべ5名の4回生が参加した（表1）。演習内容とLS実施日の実績は表2の通りであった。学生との調整がつかず、当初の予定に変更が生じたり、今回の取り組みについての周知不足による影響はあったが、課題を教員間で共有し、改善に努めた。後半の演習では、予め担当教員あるいはTAと一緒にグループに入るよう設定し、グループディスカッションの助言や心肺蘇生のアドバイスができるよう、事前打ち合わせを行った。また、事前に資料の確認ができるよう、Moodleの治療援助論のコースに、学生ロールで登録した。LS学生からは、前日の演習も見学させてほしいとの要望があり、可能な範囲で参加してもらった。演習当日は看護管理実習のオリエンテーションと重なり遅れての参加となったが、到着したタイミングで2回生全体にLS学生の紹介を行った。LS学生は積極的に2回生とかかわり、表3のような感想があった。

2回生からは、授業のフィードバックとして56件の自由記載の回答を得た。内容の類似性から、8つのカテゴリーに整理できた。【疑問を解消でき授業を受けやすかった】【同じ目線で考えてくれて学びが深まった】【滞っているときに考えるヒントを得た】【先輩のようになれるように頑張りたい】【技術のコツを教えてもらえて理解が深まった】【お互いに学ぼうという姿勢になれた】【実習の話を通してより実践的に考えられた】【優しく教えてもらえて助かった】など肯定的な意見ばかりであった。

表1. 演習内容とLS参加人数

演習内容	参加人数
注射の準備と実施	1名
緊急時の対応	4名

表2. 演習内容とLS実施日

演習内容	LS実施日
注射の準備と実施	5/18（木）1限、4限 5/19（金）4-5限
緊急時の対応	7/12（水）5限打ち合わせ 7/13（木）3限、4限（見学） 7/14（金）4-5限

表3. 緊急時の対応におけるLS学生の感想

・2回生のグループディスカッションに入り自分自身の成長を感じられた。
・事前に蘇生法の練習をしておいてよかった。
・実習や急性期看護実践論で学んだことを生かしてかかわることができた。
・自分自身の知識の再確認になり、勉強になった。

③ 成果と課題

学年を超えて学び合う機会として、学び合う仲間の存在、少し先に同じ状況を経験した先輩からの支援を得られることは、日常的に学生が学習に取り組むことを促進し、学び続けるモチベーションを維持することにつながり、相談のしやすさなど学生同士ならではの学び合いが生まれていた。実習を終えた4回生が身近なロールモデルとなり、学ぶ側の下級生は学習への動機づけが高まり、学習意欲の向上が認められた。LSとして参加した4回生も、自分自身の知識・技術・態度を振り返り、より深く学習する機会となっていた。教えるために技術練習に取り組むなど、4回生自身が主体的に学ぶ姿勢や責任感を身につけていた。

十分な準備の機会提供、役割周知や受け入れられている雰囲気づくりなど、配慮が不足した点もあるが、双方にとって学年を超えて学び合う機会となったと考える。授業との重なりもあり、導入できる演習は限られているが、4回生が参加できる機会を作ることは双方にとって有意義であり自律的な学習を支援する方策となることが確認できた。

看護技術学習サポーター 募集！

治療援助論で、2回生の技術学習をサポートする看護技術学習サポーターを募集します。看護技術の学習は、反復学習により確実に身につきますが、解剖学、生理学の知識と結び付けて根拠を学ぶことが難しい現状があります。

そこで、3回生までの臨床実習を終えた4回生の皆さんに、看護技術学習サポーターとしてお力を貸していただきたいと考えています。具体的にお願したい内容は、単元ごとに異なりますが、治療援助論の技術演習に2回生と一緒に参加していただき、技術のポイントと一緒に確認する、質問できずにいる学生が質問できるようにサポートするなど、2回生と教員をつなぐ役割をお願いしたいと考えています。是非ともよろしくお願いします。

是非ご参加ください！

- 看護技術を磨きたい方
- 看護教育についての理解を深めたい方
- 就職活動で使える実績を積みみたい方
- 授業の隙間時間に活動したい方

今回の募集は、2回生の治療援助論です。

演習内容	募集日時/申込締切	担当
注射の準備と実施	5月19日(金) 4限、5限 締切: 5月10日(水)	内田
緊急時の対応	7月14日(金) 4限、5限 締切: 7月5日(水)	大川

募集人員: 各回5人程度

申込は、各担当教員宛に期限までにメールでお願いします。

質問も受け付けていますので、お気軽にお問い合わせください

お問い合わせ先: 内田 uchida@cc.u-kochi.ac.jp

大川 okawa@cc.u-kochi.ac.jp

学習支援内容

看護技術演習に参加して、2回生が質問できるように支援するなど

演習前

事前に担当教員と打ち合わせを行います

演習後

2回生からの質問などをまとめて担当教員に報告します

報酬あり

学内アルバイトと同額、詳細はお問い合わせください

その他

- 1人に対応することはありません。必ず担当教員がいますので、確認しながら行えます。
- 参加できる場所で大丈夫です。

2) 看護学研究科の教育

令和 5 年度は、2014 年に看護学研究科看護学専攻博士前期課程および博士後期課程、共同災害看護学専攻博士課程の 2 専攻 3 課程をもつ研究科として改組してから 11 年目を迎えた。令和 5 年 5 月に新型コロナウイルス感染症は 5 類に移行したこともあり、博士前期課程は原則対面授業とし、博士後期課程については引き続き遠隔にて授業を実施した。

(1) 看護学専攻博士前期課程

博士前期課程では、高知県立大学大学院看護学研究科に関する規程等に示されている本大学院の目的、および、博士前期課程の目的、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー（修了・学位授与に関する方針）に沿って活動を行った。教育課程においては、昨年に引き続き、修士論文ルーブリックの活用、ディプロマ・ポリシー評価指標の活用、授業評価を行った。

① 修士論文ルーブリックの活用

7 つの評価項目と 4 段階の評価基準から成る修士論文ルーブリックを修士論文審査、各領域の課題研究および研究方法Ⅱの成績評価、および、研究指導時の到達度を確認する目的で活用した。

② ディプロマ・ポリシー評価指標の活用

ディプロマ・ポリシー評価指標は、修了時、ディプロマ・ポリシーに記載された能力が獲得できているか確認するために利用している。昨年に引き続き、学生自身が、主体的に、経時的にディプロマ・ポリシーに記載されている能力が獲得できているかどうかを確認し、満たしていない場合は、どのような科目が能力獲得の手助けとなるのか教員と相談できるような体制をつくり運用していくこととした。まずは、学生にディプロマ・ポリシー評価指標の活用について説明する機会を設け、ディプロマ・ポリシー評価指標を学生に配布している。

③ 授業評価

今年度も授業(講義・演習、実習、研究)の質向上、質保証を目的として、科目毎に授業評価を行った。アンケート項目は、ニーズへの合致、理解、専門性、講義方法などを含む 9 項目からなり、「5 非常にそう思う」～「1 全くそう思わない」の 5 件法で評価を求めた。表 1 に設問 1～8 (設問 1 授業内容は学生のニーズに沿っていた、設問 2 授業の内容は理解できた、設問 3 授業内容は自分の専門分野の学習に役立つものであった、設問 4 授業の方法や進め方は、学生が主体的・能動的に参加できるように工夫されていた、設問 5 教員は学生の意見や発言内容を反映しながら授業を進めた、設問 6 私はこの授業を通して、主体的に調べ、探求する施設が身についた、設問 7 私はこの授業を通して、専門的知識・技術(専門性)を高めることができた、設問 8 この科目の授業は総合的に判断した満足できるものだった)の結果(講義・演習、実習、研究すべてを合わせたもの)を示す。回答数は、82 科目回答数 125 件、回答率は 47.0%であった。評価平均は 4.3、すべての設問で、「非常にそう思う」「そう思う」が約 9 割を占めていた。

表1 設問1～8に関する回答結果

	非常にそう思う		そう思う		どちらとも		そう思わない		全く思わない		合計
設問1 ニーズとの合致	51	(40.8)	58	(46.4)	14	(11.2)	2	(1.6)	0	(0.0)	125
設問2 内容の理解	42	(33.6)	74	(59.2)	9	(7.2)	0	(0.0)	0	(0.0)	125
設問3 専門分野の学習への有用性	60	(48.0)	61	(48.8)	4	(3.2)	0	(0.0)	0	(0.0)	125
設問4 授業の方法と進め方	58	(46.4)	55	(44.0)	9	(7.2)	3	(2.4)	0	(0.0)	125
設問5 学生の意見等の反映	61	(48.8)	48	(38.4)	14	(11.2)	2	(1.6)	0	(0.0)	125
設問6 主体性・探求的態度	61	(48.8)	48	(38.4)	14	(11.2)	2	(1.6)	0	(0.0)	125
設問7 専門的知識・技術の向上	49	(39.2)	69	(55.2)	7	(5.6)	0	(0.0)	0	(0.0)	125
設問8 総合的満足	55	(44.0)	59	(47.2)	10	(8.0)	0	(0.0)	1	(0.8)	125
割合	43.70%		47.20%		8.10%		0.90%		0.10%		125

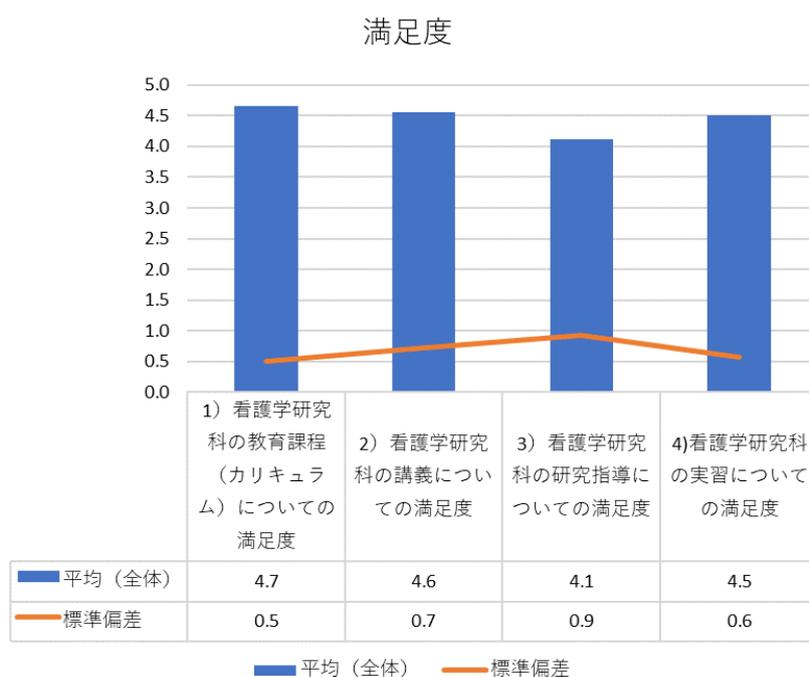
④ ディプロマ・ポリシーの評価

令和5年度の修了生を対象に、カリキュラム、講義、研究指導、実習指導の満足度とともに、本研究科の6つのディプロマ・ポリシー（DP）の修得について、5件法で調査を行なった。回答数は9名（64.3%）であった。

満足度については、グラフ1に示す。全体の平均値は4.5（±0.7）と高く、中でもカリキュラムに対する満足度が4.7（±0.5）で最も高かった。

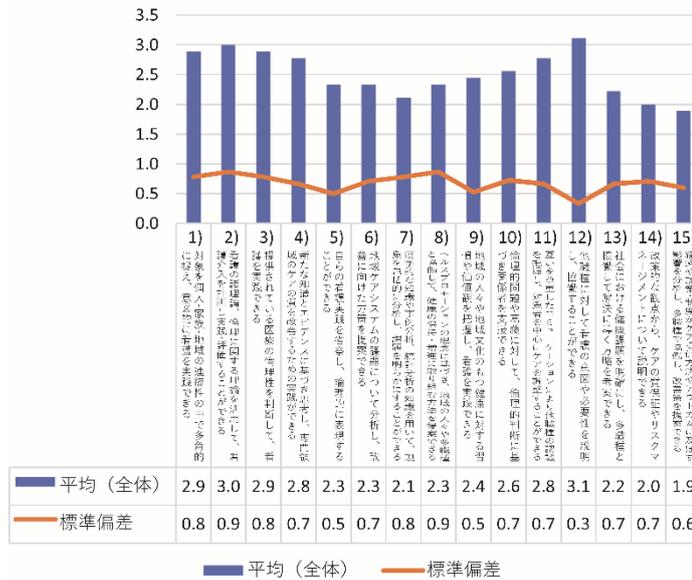
DP評価については、グラフ2に示す。全体の平均値は2.37（±0.80）であった。平均点が高い順に、DP1（2.8）、DP4（2.5）、DP2（2.4）、DP3（2.4）、DP5（2.3）、DP6（1.9）であった。項目別では、平均点が高い項目はDP2②「他職種に対して看護の意図や必要性を説明し、協働することができる」で3.1、最も低い項目はDP6①「①グローバル社会における人々の健康問題を俯瞰し、文化や歴史的背景を含めて説明できる」で1.8であった。

グラフ1 カリキュラム・講義・研究指導・実習指導の満足度

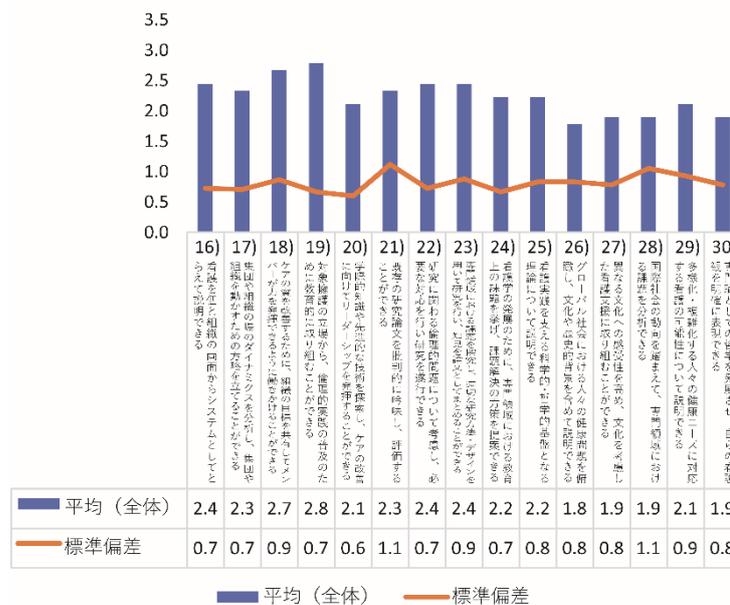


グラフ 2 DP 評価

DP1/DP2/DP3の評価



DP4/DP5/DP6の評価



「看護学研究科が今後さらに充実・発展していくために、取り入れたらよいと思うことや必要だと思うこと」に関する自由記載には、「国際的な視点で研究、実践されている方の話を聞く機会があるとよい」「同級生と話すことで視野の広がりを感じたため、一定数の学生数を確保することが必要だと感じた」「1回生後期以降は、実習と研究で個人の活動が多かったが、同級生とディスカッションできる授業が組み込まれてもよいと感じた。学年が異なっても、同じ領域の学生と一緒に授業を受けられる機会があればよいと感じた」などの意見があった。

(2) 看護学専攻博士後期課程

博士後期課程では、高知県立大学大学院看護学研究科に関する規程等に示されている本大学院の目的、および博士後期課程の目的に沿って、また、看護学研究科委員会で年度当初に立てた活動目標をふまえて活動を行った。この活動目標のうち、博士後期課程に関連する目標として、目標2「質の高い学生の確保」、目標4「大学院コアコンピテンシーに基づく教育の質向上」が挙げられる。まず、これらの目標の下位目標の中でも教務活動に関連することを中心に、本年度の活動を評価し、その他の活動を通しての評価、それらをふまえた次年度への課題を明らかにする。

① 目標2-2) に関する評価

目標2-2) 多様な学生のニーズに対応するため、博士後期課程、博士前期課程実践リーダーコースの遠隔教育を促進する

博士後期課程の科目は、専攻教育科目（理論看護学Ⅰ、看護学研究方法Ⅰ、看護倫理学）についてはすべて遠隔で実施した。非常勤講師の担当科目の一部は講師の要望もあり、対面で実施したものもあったが（イノベーション看護学：集中講義・ハイブリッド、理論看護学Ⅱ：2コマのみ対面）、遠隔授業が中心であった。対面での講義を希望された非常勤講師は、今年度が初めての講義であったこともあり、学生の反応を間近に確認しながら進めたいとの意向であったが、来年度以降も継続の講師については、遠隔授業への移行は可能であると考え。機器のトラブルはほとんどなく、遠隔でも学生同士のディスカッションは活発に行われており、学生にとっては、身体的、経済的負担の軽減というメリットは大きく学修成果としても大きな課題はないと考えられる。

② 目標4に関する評価

目標4-1) DP評価指標を活用した調査結果の評価・分析を継続し、科目とDP・CPの適合の課題を抽出し対応する

本年度は、9月修了生2名、3月修了生3名に対して修了時のDP達成度調査を実施した。データの分析については、10名以上の修了生からのデータが蓄積されてから行うこととしているが、修了時だけでなく、年次ごとの達成度の確認における活用を促し、タイムリーに課題の抽出と改善に向けた取り組みが行えるようにする必要がある。併せて、R3年度から導入した学位論文ループリックも用いることで、部分的ではあるが、DPの達成度を評価することは可能であると考え。

③ その他の活動に関する評価

i. 国際性、学際性の強化

今年度もCOVID-19の影響により、国際学会への参加や海外の提携大学からの講師の招聘などは実施されなかった。昨年度新設された「プロフェッショナルライティング」は今年度は履修がいなかった。また、学際性の強化に関しては、学術研究戦略委員会が主催する「学際的交流サロン」や「越境シリーズ講座」について学生にもアナウンスを行い、参加を呼び掛けているが、有職の学生は参加が難しく、これらの学生の学際的な学びの機会をどのように作るかは課題であると考え。

④ 次年度に向けた課題

次年度も引き続き、遠隔授業を中心とした開講となる予定である。指導教員とも連携をはかり個々の学生のニーズや状況を把握するとともに、非常勤講師からも学生の反応や課題などについて意見を伺い、効果的な学修が行えるように支援していく。

DPの達成度調査、学位論文ループリックを用いた評価については、修了生だけでなく、各年次の経時的な評価も行い、カリキュラムに関する課題の確認と対応策につなげられるようにする。

(3) 共同災害看護学専攻博士後期課程(DNGL)

① 教育の概要

令和5年度災害看護共同教育課程は、本学、兵庫県立大学、東京医科歯科大学、千葉大学、日本赤十字看護大学の5大学による連携でコースが運営された。共同教育課程運営委員会は、佐々木吉子委員長の元、事務局は東京医科歯科大学が担当し、副委員長に本学木下真里が就任して運営にあたった。

コース全体としては、9月に日本赤十字看護大学、3月に千葉大学でそれぞれ1名ずつが課程を修了した結果、年度末時点の在籍者数は、千葉大学、日本赤十字看護大学が各5名、本学が3名、東京医科歯科大学は2名、兵庫県立大学では1名となり、確実に減少している。一方で、就労の都合や家庭の事情、妊娠・出産による長期または断続的な休学者も複数おり、この中には **Qualifying Examination (QE)** 未了または **QE** 合格後数年経過した状態の学生も含んでおり、まだ全員の修了には相当の時間がかかること予想される。

いずれの学生も、博士論文研究を除き、ほとんどの科目を履修済みであることから、今年度はごくわずかな科目（インターンシップ I 他）のみ開講した。**QE** は本学の1名を含めて、2名が受験し合格した。

② 本学在籍者の動向

本学では今年度、2016年度入学者、2018年度入学者、2019年度入学者がそれぞれ1名ずつ、3名が在籍した。1名は前年度から1年間休学延長（2022年後期～2024年3月）、1名は年度の途中で休学（2024年2月～2025年3月）した。この2名の休学者はいずれも **QE** 未了であり、修了までに数年かかる見通しである。

③ コンソーシアム科目

令和3年より開始した、**DNGL** コンソーシアム科目については、今年度も引き続き12科目が提供された。本学においては、2科目「環境防災学」「災害看護活動論（準備期）」計3単位を提供し、のべ6名（うち1名は他大学所属）が受講した。また、本学からは2名の学生が他大学提供のコンソーシアム科目のべ3科目を履修した。

これまで **DNGL** で環境防災学の授業を担当されていた大村誠教授が退官されることから、本来大学の強みや特徴を生かした科目提供を行うという、コンソーシアム科目の趣旨を踏まえて、本学の特徴を示す科目提供に向けて、次年度より科目構成の見直しを検討する。

④ 災害看護副専攻認定プログラム

令和3年度より本学が開始した災害看護副専攻プログラムは、災害に強い高度実践家、研究者、実践リーダーを育成するために、他の看護学領域を専攻する学生に、災害看護学について学ぶ機会を提供するものである。認定要件は災害看護副専攻プログラムに関する規定、(看護学専攻博士後期課程において「災害・国際看護学分野」を専攻し修了に必要な単位を履修し、さらに、高知県立大学、兵庫県立大学、東京医科歯科大学、千葉大学及び日本赤十字看護大学の5大学院によるコンソーシアム科目10単位以上を履修した者の学位記には、「災害看護グローバルリーダー養成プログラム(Disaster Nursing Global Leader)」を修了したことを付記する。)に定められる通り、**DNGL** コンソーシアム科目の履修を副専攻認定の柱としている。

令和3年度以降、副専攻認定対象科目を受講し単位認定を受けたものが複数でているが、これまで認定に至ったものはいなかった。令和5年度は、実践リーダーコース（地域保健学専攻）の学生が災害看護副専攻プログラム修了第一号として認定を受けた。今回単位認定を受けた学生は、前年

度からこのプログラムに取り組んでおり、限られた受講日程のなかで所定の 10 単位を取得して認定を受けることは困難と考えられたが、今後、副専攻を履修する前例となることを期待している。

これまでの履修状況から、副専攻プログラムの履修の仕組みがわかりにくいこと、履修方法の周知が十分でないことが認定の障壁となっていることが考えられた。次年度の新入生オリエンテーション資料では、より分かりやすい内容に改訂を行う方針である。

⑤ 学位記への「Disaster Nursing Global Leader」の付与

令和 3 年度に開設の災害・国際看護学を専攻する博士後期課程学生に対しては、所定の単位を取得することにより、学位記に「Disaster Nursing Global Leader」を付与することを規定している。

対象となる学生は、今年度後期より復学しており、今後学位記への DNGL 付与実現が期待される。